



複式簿記

校長 原 順彦



前東京都知事の石原慎太郎氏から、「国や多くの地方自治体が、未だ単式簿記を採用している。複式簿記を採用しない国は、数力国のみ。それでは、財政再建はおぼつかない。」といった発言を、最近何度か聞いた。

複式簿記は、中世(室町時代)イタリアの数学者ルカ・パチョーリ(1445年頃)によって書かれた算術・幾何・比及び比例全書と呼ばれる本の中の「簿記論」の考え方である。物事を数値化し二面(複式)で捉える。二面は表裏一体であるので、数値化しても、必ず合致するのである。商業教育では、必修科目の「簿記」の中心をなしている。単式簿記は小遣帳に例えられる。日々の収支をコツコツ記録することには、便利である。また、誰でも直ぐに記帳することができる。しかし、半年や1年の収支状況の分析や原因を探ったり、現在の資産・負債状況を確認するには、複式簿記が断然有利である。また、取引が正しく行われたか否かを管理し監視することにも優れている。だから日本の企業の大半は複式簿記を採用し、必死に企業努力を行っているのである。

先日、情報会計科主任で簿記部顧問の山口能敬教諭から朗報があった。久保亮太君(情報会計科3年・田浦中出身)が「簿記論」に合格したことである。この快挙は、昨年の日商簿記1級合格に続き、ものすごい難関を越えての合格である。税理士試験では、まず日商1級レベル(合格者等の基準あり)が求められる。その後、必修科目の簿記論と財務諸表論、その他3科目を取得しなければならないが、高校生での合格は稀である。また、坂口葵さん(情報会計科3年・鏡中出身)は、税に関する作文コンクールで国税庁長官賞を受賞した。「もし日本が会社であつたならば・・・」というタイトルで、消費税についての考えを発表した。やはり思考の基本には簿記の知識を持っており、説得力のある作文であつた。二人の快挙は、近い将来、東高生の税理士誕生を予感する出来事でもあつた。

これからの世界経済は、ますますグローバル化し、不透明になるのではと危惧されている。日本経済は、「失われた20年」といわれ久しいが、社会や経済に対する考え方や見方の「基礎・基本」として、複式簿記を根底に据えることは、やはり大切なことではないだろうか。先を見すぎず、肝心な足もとがおろそかでは、国や地域、企業の成長が危ぶまれる。商業生に期待されるのも、その肝心な基礎・基本の部分と、国や地域や企業に如何に貢献したいかの強い信念のように思われる。

本校現役生徒で初の快挙！ 税理士試験 「簿記論」合格

3年情報会計科
久保亮太君(田浦中出身)



7月31日に実施された平成24年度(第62回)税理士試験において、3年情報会計科の久保亮太君(田浦中出身)が「簿記論」に合格を果たしました。難関とされる税理士試験に高校生が合格するのは極めて稀で、本校では創立以来初の快挙となりました。

久保君は2年次に日商簿記検定1級、全経簿記検定上級に合格(いずれも本校初)。今年7月8月に行われた全国高等学校簿記コンクール(個人の部)に出場、IT簿記選手権九州・沖縄大会では個人の部で準優勝など、競技大会でも優秀な成績を収めています。これらの功績を讃えて「平成24年度熊本県がんばる高校生」に選ばれ、11月5日の授賞式では蒲島知事より表彰を受けました。久保君の頑張る姿勢と「簿記論」合格のニュースは、生徒の皆さんにも大きな励みになったことと思います。

「悔しい思いをしたこともあつたが、簿記部の仲間やクラスメイトの応援があつて頑張ることができた。今後の目標は、20代で税理士資格を取得(5科目合格)し、地元で事務所を開き、経営者視点を持った税理士として活躍していきたい」と語ってくれた久保くん。今後益々の活躍を期待しています。合格おめでとう!!

熊本県教育功労者表彰受賞 鬼塚博光先生(体育科)



本校体育科教諭、野球部監督の鬼塚博光先生が、熊本県教育功労者(優秀教職員)表彰を受けられました。野球部の甲子園出場をはじめとする部活動指導における多くの実績や、クラス経営、授業における抜群の指導力を讃えて今回の受賞となりました。11月27日に行われた校内表彰式では、生徒に向けて講話をされ、野球におけるチームワークの大切さを例に挙げて、チーム(周りの人)のために何ができるか考えて行動しよう!と話をされました。

平成24年度「税に関する高校生の作文」
国税庁長官賞を受賞
3年情報会計科
坂口葵さん(鏡中出身)



平成24年度「税に関する高校生の作文」において、坂口葵さんの作品が国税庁長官賞を受賞しました。応募総数18万通の中から10通程度が選ばれる最優秀賞です。簿記の知識を基に書かれたすばらしい内容でした。(作品を裏面に掲載しています)

平成24年度「税に関する高校生の作文」において、坂口葵さんの作品が国税庁長官賞を受賞しました。応募総数18万通の中から10通程度が選ばれる最優秀賞です。簿記の知識を基に書かれたすばらしい内容でした。(作品を裏面に掲載しています)

笑顔満開! 深めよう絆～東高マーケット2012～



毎年好評の東高オリジナルタオル。今年も完売でした!

いらっしやいませ!



地域特産品コーナーでは、全国各地の特産品を取り寄せて販売しました。



焼きたてパンの販売。お昼には行列ができて完売するほどの人気。



名物・てんこもり味噌。「いっかーい!」と元気の掛け声!



商品紹介のポップ。お客様に伝わるよう、一生懸命作りました。



1年生は裏方作業で先輩方をサポートします!(写真は銀行業務)



実行委員長 副委員長の感想

実行委員長 河野里奈さん(八代一中出身) 写真右



東高マーケットお疲れ様でした。今回実行委員長として大役を務めさせていただきましたが、不安はありませんでした。正直、初めは実行委員長の自覚が薄かったのですが、社員総会等前に立って話をする度に実感がわいてきました。当日は一人ひとりが責任を持って積極的に取り組んでいて、とても嬉しかったです。来年は今年の反省点である「生徒全員が社員という自覚をより強く持ち、おもてなしの心を発揮する」ことを心にとめて、準備から頑張ってほしいと思います。ありがとうございました。

副実行委員長 谷川遥さん(小川中出身) 写真左

私は今回、東高マーケットで副実行委員長を務めさせていただきました。貴重な経験ができました。最初は自分にできるのか不安でしたが、周りの先生方や友達にアドバイスをもらい、頑張ることができました。みんなの前で話す言葉を考えることはとても難しく、また話をする時とても緊張しました。今回このような経験ができたことを嬉しく思います。なぜなら、みんなが協力し合い、楽しく無事に成功させることができたからです。みんなの先頭に立って引っ張っていくことの大変さを学び、自分も成長することができました。最後のマーケットを成功させることができてよかったです。

おかげさまで東高マーケット2012を無事実施することができました。ご来場いただいたお客様をはじめ、ご協力いただきましたお客様をすべてに感謝申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。
東高マーケット2012

平成24年度「税に関する高校生の作文」 国税庁長官賞受賞作品

「もし、日本が会社であったなら…」

熊本県立八代東高等学校 3年 坂口 葵(鏡中出身)

「簿記だけでは意味がない。経済についても知っておかなければならない。」ある日の授業中、先生が発されたこの言葉がズシリと心に残りました。これをきっかけに、私は日本の経済について興味を持つようになりました。私は商業高校に在籍し、部活は一年次より簿記部に所属しています。簿記とは、経営活動を記録・計算・整理して、経営成績と財政状態を明らかにする技能のことです。簿記がわかるようになり、経済についても興味、関心が広がっていきました。

特に注目したのは日本の財政についてです。よく消費税の論議がなされていますが、「何故、消費税率を引き上げる必要があるのか。」私はその理由を知るべく調べてみることにしました。日本の平成24年度の当初予算は約90兆円、そのうち約47%が所得税などの「租税・印紙収入」で、残りの約49%が「公債収入」、国の借金です。加えて、公債の残高は約709兆円で、国民一人あたり実に約554万円の借金を背負っていることになりました。この事実を前に、「もし会社であったなら…」私は言葉を失いました。

それでは、この状況を打破できる解決策はないのでしょうか。身近な家計を例に考えてみましょう。まず、これ以上借金を増やさないと、計画を立てて無駄な支出を抑えます。次に、収入を増やす努力をします。借入返済が早いほど、利息の負担が軽くなるからです。その後、借金や、無駄な出費をせず、収入を増やすことを続けていくと収支のバランスが良くなり、家計は安定してきます。

これを国家に置き換えてみましょう。公債を増やさないと、公共のサービスを減らしたり、質を落としたりする必要があります。例えば、消防車、救急車は受益者負担になりますが、これを私たちは受け入れることができるのでしょうか。

あるいは、税収を増やすといっても、超少子高齢化の日本は、これからより生産年齢層が減少するのであり、大幅な増収は望めません。ましてや、国際競争の矢面に立たされてる企業にさらに負担を強いるのは、企業の海外流出を加速させることになりかねません。こう考えていくと、私たちが「現状の生活を維持したい、しかし、将来につけを回すことはできない」と考えるのであれば、国民が等しく公平に負担することになる「消費税」という選択肢にたどり着くのです。

今、日本は未曾有の大震災「東日本大震災」によって、この苦境を国民一人ひとりが分かち合うことが求められています。国家の将来も同じです。やみくもに増税に反対するのではなく、現状を理解し、自分のこととして真剣に考えなければなりません。一番よくないのは無関心であることです。「日本が、もし会社であったら…」その意味する先に何が待ち受けているのか、私たちは見通す目を持つことが何より大切なのです。